



Title: 食欲と芸術と読書の秋

去る8月20日の本紙に北秋田市出身のクラリネット奏者・米倉森さんの記事が。ドイツ留学は聞いていましたが、ブランデンブルグ州立管弦楽団の首席奏者になっていたのですね。天使のような赤ちゃんの頃を知る者としては、ひたすら嬉しいニュースでした。がんばれ、モリちゃん。

❖大館で室内楽公演を続けること

10月3連休の大館は、樹海ドームのきりたんぼまつりが大盛況。天候に左右されないドーム開催のありがたみが実感できる3日間でした。10月のドームは大規模イベントが目白押しでご同慶の至りです。スタッフはさぞかしたいへんでしょうが。

市民文化会館に目を転ずると10日に開催された「ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団」のコンサート。大入りは望めない室内楽とあって集客は苦労したようですが、演奏は絶品！ピアノ、ヴァイオリン、チェロのいわゆるピアノ三重奏は、それぞれが独奏楽器ということもあって、室内楽の中でも華やかな音色を楽しめる点では一番だと思います。しかもメンバーがすごい。ヴァイオリンのダニエル・ゲーデは世界に冠たるウィーン・フィルの元コンサートマスター、チェロのグスタフ・リヴィニウスは1990年のチャイコフスキーコンクール優勝者、そしてオリヴァー・トレンドゥルはソリスト・伴奏者として世界中から引っ張りだこのピアニスト。それなのに皆、気さくで明るい人たちです。

彼らをマネージしているのがNPOフレンドシップコンサートの丸岡さん。大館の翌日は横浜と京都で3つのステージを設定するというありえない仕込みをする人です。しかしその合間に京都の一流料亭での会食という芸の細かさも。意気を感じて強行スケジュールを喜々としてこなすメンバーも大したもんです。

大館公演の主催者は「ウィーンフィルメンバーによる室内楽を楽しむ会」。主宰する谷川原郁子さんが、自身まだ東京にいる頃から大館の知己を語らって会を始めました。蛮勇というか、怖いもの知らずというか……。しかし、たいへんな思いをしながら20年、21回ものコンサートを続けてきたのは壮挙です。弦楽器をやる人もほとんどいない大館で超一流の室内楽公演が続いている。そのありがたみと20年間チケット料金を上げていない（つまり採算度外視の）心映えに感じていただけたら、来年は皆さんでぜひ。

❖チェリストは温かい

メンバーのひとり、リヴィニウスさんと話す機会がありました。住まいはドイツ西部の町。ドイツ語は分からないのでお互いたどたどしい英語で。それにしても、語学も使っていないと悲しいほど錆び付くものですね。チェロが大好きだし、これまでに会った音楽家を考えてもチェリストは性格が良い。リヴィニウスさんも、気遣いのある優しい人でした。

大館は自然が豊かで空気もおいしくとても良い所と言うのは、まあそこしかなくともこちらと思うわけですが、どうやら本気のホメらしいです。さらには文化会館の音響が良いとも。これについては私も同感です。ひところホールの善し悪しを残響の

長さで語る風潮がありましたが、長すぎる残響は鑑賞のじゃまになる場合も多いのです。大館の大ホールの残響は2秒弱。このくらいが音の粒立ちがよくて、気持ちよく聴けると思います。このホールで、最後の残響が天上に消え行くような至福の瞬間を、私は2度経験しています。

もうひとつ、リヴィニウスさんに聞いてみたかったのが彼の地での佐渡裕の評判です。5年前にはベルリン・フィルの定期も振り、昨年ウィーン・トーンクンストラ管弦楽団の音楽監督にも就任したので、名前くらいは知っているかと思いきや、全然知らないとの返事。う～む、世界は厳しいですね。

❖最後に本の話

なんだか文化会館寄りの内容になってしまいました。最後に音楽の本を紹介します。リヴィニウスさんのファーストネームにちなんで、指揮者・作曲家のグスタフ・マーラーについての本を。

ヴォルフガング・シャウフラー編『マーラーを語る 名指揮者 29人へのインタビュー』（音楽之友社、2016年、中央図書館所蔵）です。同じ質問を当代29人の名指揮者にぶつけ、しかし語られたマーラー像は千差万別。マーラーの複雑さとそれゆえの面白さが浮き彫りになっています。それぞれの指揮者の個性の違いも露わになって、聴いたことのない曲も聴いてみたくなること請け合いです。

「高校生ビブリオバトル2016大館大会」はいよいよ明日15日（土）、午後1時半スタートです。7名の高校生バトラーが出演します。中央図書館2階資料室へどうぞ。入場自由、もちろん無料です。 （陽）